



# 楽々亭通信

第16号  
発行: NPO法人没イチの会・京都  
令和3年12月1日号

## 十一月の楽々亭第14回を

### 開催いたしました

『年賀状に思うこと』

本願寺派布教使

安堂芳雅

こんにちは、安堂です。  
今年も残り一カ月となりました。

ビリビリ、ビリ。あと一枚きりのカレンダーをみて、頭に浮かぶあれこれ。年賀状に大掃除、お歳暮、新年の準備…。「あー、気ぜわしい！」毎年ぼやく私の横で、いつも「また一年、この世においてもらえました。」と手を合わせていた母は、このたびは病院で新しい年をいただきます。

年賀状の文面を考えた時期は、「欠礼はがき」が届く時期でもありません。



本来、浄土真宗では、いのちを終えたその時に阿彌陀さまのお浄土に往生し、仏と成らせていただくわけですから、死を穢れととらえ、特定の物事を遠慮するような「喪中」という期間はありません。年賀状を出すのもまったく問題ありません。せつかく大切な方の葬儀をご縁に、あらためて浄土真宗のみ教えにあわれたのに、世間の慣例に流されて喪中はがきを出すのは残念です。

そこで広島のお寺さんたちが「寂しさの中にぬくもりがあり、悲しみの中にもいのちの大切な見つめ方があります。」というこ

## またひとつ、お浄土に蓮の花が開きました

如來さまの願いに、「先」の決まった安心が生まれます。

昨年〇月〇日、〇〇〇が〇〇歳で、お浄土に生まれさせて頂きました。悲しみは尽きませんが、〇〇の命はお浄土の蓮の花より仏さまと生まれ、私たちを阿彌陀さまのお慈悲に導いてくれます。

〇〇のお育ての中で、家族が静かに手を合わせ、お正月を迎えることができました。

皆様には、これから変わらぬ御厚誼のほど、深くお願い申し上げます。  
令和 年 元旦

柱文の「またひとつ、お浄土に蓮の花がひらきました」という一文は、もとは鹿兒島のご住職が大阪のお寺さんの葬儀に送られた言葉だそうです。

“あなたを必ずお浄土に生まれさせ(往生)、仏にさせる(成仏)”という

また、「死」を喪失と厭うのではなく、別れを悲しみつつも、一つの節目として受け入れ、仏さまとなつた故人と、再び共に生きてゆくのです。

学生時代からの友人が、お母様の往生を知らせる手紙に、

「如來さまのお慈悲のおかげで、安心して悲しむことができました」と書いていたのを思い出しました。

● 仏さまの足は「カモシカのような足」

昔テレビで見た、お笑い芸人さんのやりとりです。

A 「えっ、どんな足やつて？」

B 「あだから、すらーつとしててな、カモシカのような足や」

A 「えっ、カモシカのような足か？」

B 「そや、すらーつとしててな」

A 「カモシカはすらーとしてないやろ」

B 「？」

A 「アホ、それをいうなら、カモシカの足のような足や」

仏さまのおすがたの八番目の特徴は、「伊泥延膊相」(いでいえんせんそう)で、足のふくらはぎ(膊)が鹿の王さまのようにスマートなのだそうです。

ここで、今までご紹介した仏さまの足の特徴をまとめてみると、

① 「足下安平立相」足裏がスライムの様で、地面に高低があっても全体が常に密着する。

② 「足下二輪相」足裏には車輪の模様がある。

③ 「長指相」足の指が長い。

④ 「足跟広平相」足の踵は広く平ら。

⑤ 「手足柔軟相」柔軟である。

⑥ 「足跌高満相」足の甲が高く満ちている。

そして、今月ご紹介する、「鹿の王さまのような、スマートできびきびとしたふくらはぎ」をお持ちです。

どうやら仏さまは、私がどんなにおすくいから逃げようとしても、どこまでも追いかけて抱きとることができるように、長い長い間筋トレをされておられたようです。

仏さまのお慈悲のはたらきから、逃げられるものは決してありません。

● 楽々亭のみなさん、父母、兄弟のような人生の先輩方から今年一年たくさんの方の事を教えていただきました。ありがとうございます。

どうぞ、よい年をお迎えください、来年もよろしく！



松竹のプロデューサーとして

その8

「高峰三枝子さんの思い出」

今回は種々な女優さん達と仕事をし、良かった事、悪かった事を告白致します。

その前にちょっとショックを受けた報道がありました。

それは、瀬戸内寂聴さんがお亡くなりになられた事です。寂聴さんと、作家の里見淳氏と小生の3人で上七軒のお茶屋さんで食事をした時の事です。大小説家の里見淳氏の小説「多情仏心」という題名を寂聴さんの長襦袢の裾に太字の墨で書き、それを蒸して模様の一部としたのを寂聴さんに渡された時、寂聴さんは一生の宝と致します

と、深々と頭を下げられた情景が浮かんで来ました。2人の大作家と共に食事をした事は私の一生の宝物としての思い出で御座います。ご冥福をお祈り申し上げます。

さて、仕事をして印象の強よかった女優さんは高峰三枝子さんでした。

必殺シリーズで山田五十鈴さんの次に登場されたのが、高峰三枝子さんでした。撮影で風呂に入るシーンがあった時、形だけの入り方にしようと思っておりました所「そんな中途半端な撮影はだめよ」と云われ「もつとリアルにしてこそ、必殺の面白さがあるのよ」確かにそこは大切なシーンであった事は間違いはなかったのですが、撮影当日の朝「私、裸で入るわよ」と云われ、根が好奇心旺盛な櫻井洋三ですので、「わかりました、やりましょう」と私も深く考えまして、監督、カメラマン、照明、私と4名のみで撮影に入りました。高峰三枝子さんの堂々とした、振る舞いに4名が圧倒され恐縮した次第です。

その高峰三枝子さんの放送の

時の視聴率が最高の43%を取り、私はさすが大女優は違うなあと感じました次第です。撮影が終わった後高峰さんと祇園へ食事に行き、後に歌を歌いに行きました。高峰さんは「湖畔の宿」、私は厚かましく高峰さんへの持ち歌「古い日記のページには」を恥ずかしながら、本人の前で歌いました。高峰さんは大きな拍手をなさってくださいまして、何か親心の様に思えました。親方として半年間出演をしてもらいました。

私が作りました数々のシリーズの中で忘れがたい作品です。又来月号でお会いしましょう！

櫻井洋三

楽々亭第15回 12月の予定

12月14日(火)

西京区役所洛西支所会議室

午前10時~12時

11月に開催した場所です。

表玄関口から入って下さい。

楽々亭通信

発行元：NPO法人 没イチの会・京都

住所：京都市西京区大原野東境谷町一丁目1番地4-701

TEL：075-874-5320 FAX：075-874-5328

MAIL：kago@botuichi.com

● 楽々亭通信では、皆様の投稿を募集しております。身の回りの出来事や体験談など、何でも結構です。楽しかったこと、つらい想いをしたことなど、様々な胸の内を皆様と共有して行きたいと考えております。